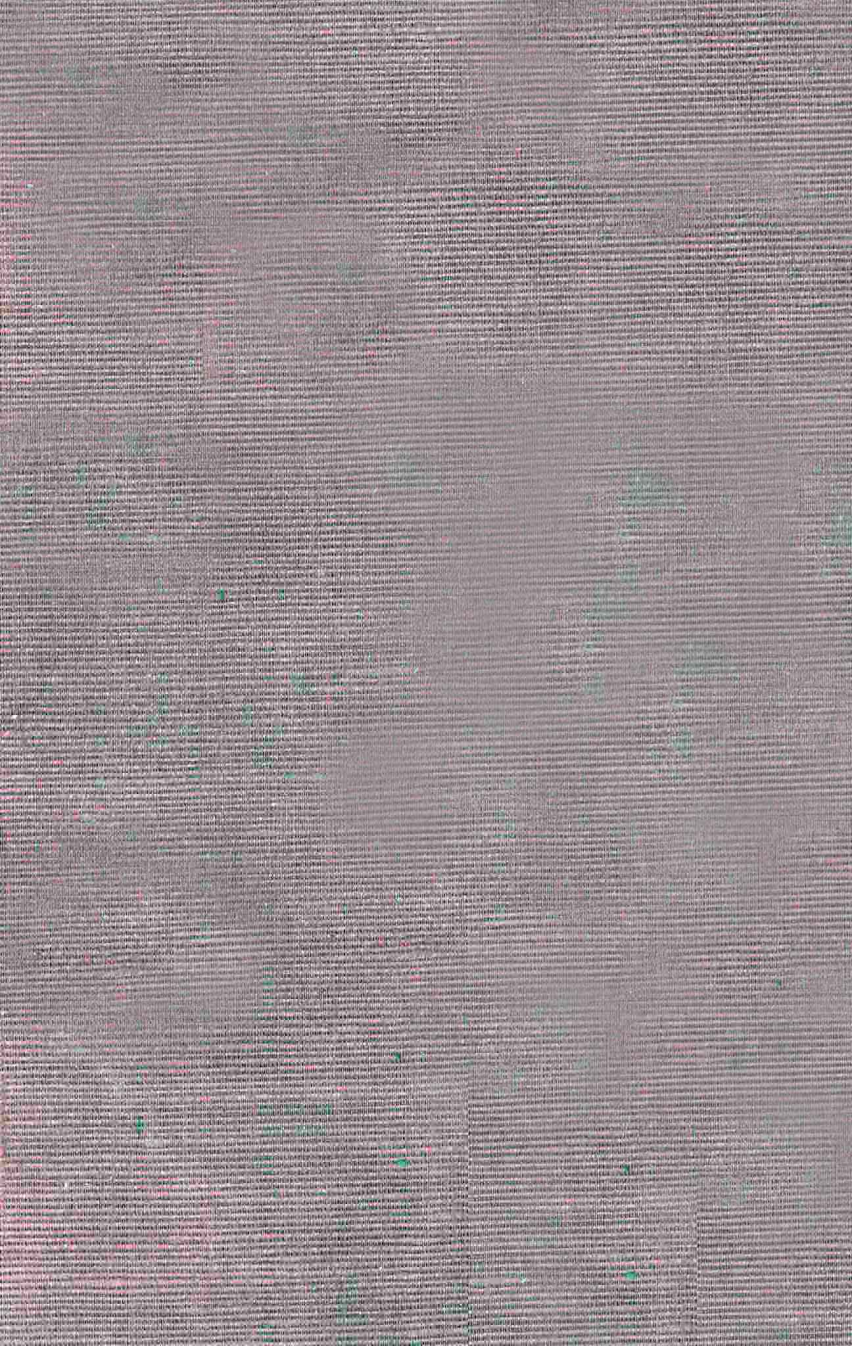




落語名作全集（第二期）第一卷

昭和三十六年十二月十日 印刷
昭和三十六年十二月十五日 發行

定価 三七〇円

発行者 八重樫 晃

印刷者 草刈 親雄

発行所 株式会社 普通社

本社 東京都中央区日本橋江戸橋一ノ九

電話（三七二）〇六八三・八七四〇・八七五五

振替 東京 六四五九三

編集室

東京都中央区日本橋通り二ノ二
電話（三七二）五五二二・三九六八

落語名作全集

第2期（I）

監修者のことば

吉川 義雄

桂文楽師匠がこの秋、紫綬褒章を授けられた。これは勲章だから、何でも彼でも有難いと言うのでもなければ、また、小理屈を申すのでもなく、わたしは素直に、師匠の、あのみがき上げられた落語への、讃辞としてうけとれたのである。立派なものを、立派なものと、表向き評価されたことを喜ぶのである。

いま、落語は都会の一部の聴き巧者のためのものでなく、この国の津々浦々で、最も国民に迎えられている「芸」の一つとなった。そして、毎日の放送番組の中心としての半座をわかっている。若手の志望者も増えた。その生活も、随って大きく変貌して来た。わたしは、席亭の不振については、いま言うまい。ただしである。この素晴らしい話術芸の、もう一つ脱皮しつつある前向きの姿勢を可しとしたい。

「全学連」ならぬ、「全落連」の、あのひたむきな人々のあることも、夢、忘れ得ない。嬉しいと思う。

ただし、もう一度、ただしと言いたい。それは人々の嗜みは、おのがじしあることで、また別の問題である。ということとは、そんな「なまくら四つ」見たいなと言われようが、わたしは、「芸」と対決したのであって、所謂、「古典派」「新作派」の争いには組しないということである。みんな、血をにじませていそしんでいる、そんな芸人が多ければ有難いのだ。

顧みれば、「明治維新」ということは、どんなに大きい生活態度の変動であつたらう。そうして、江戸期に発達開花した落語は、この大変革によくも耐えて、さらに明治大正期にその名を遺す名人・上手によって練られ、磨きあげられたのであつた。百花繚乱、文字通りのそれであつた。その姿を、幸いにも活字に書きとめたものが、この度の全集であつて見れば、わたし達は、この「百花園」に足を踏み入れることによつて、古人の、或いは今人との「芸」競べが可能なのだ。さらに、伸び行く「話術芸」へのそれも。そう考えると、生き甲斐と申そうか、ほのぼのとした楽しさがわが身ににじんて来る。

羽織の遊び



古今亭 今輔

・二代目・

エエ一席で機嫌をうかがいます。エエお話の方へ出ますものは、はじめでは大がいお笑いにはなりません。どっか一と調子変わった人物がそれへ出まさんと、おかしくありませんが。落ち行くところは色情欲情にかざりますが、殿方のお遊びでは女郎買いはど愉快なものはないと申しますが、実に結構なもので、お金さえもってまいれば、お酒を飲んでうまいものを食べて、きれいなねえさんに抱ッとしてねんねをして帰るんでげすから、このくれえの愉快がありますまい。中等社会から下等社会のものまで、一度このお遊びにおいでになりますと、ずいぶん夢中になることがあります。

女郎買ひ振られて帰る果報もの

てエ狂句もございますが、振られるのはあまり果報じゃありません。同じことならばもてたいもので

それだから朝吉原帰りのおかたの歩きつきを見ると、もてたか振られたかがじきにわかります。もてたかたはどことなく意気揚々として、往來をいばつて歩いていらっしますが、振られたかたは歩く

にもいやに小さくなつて、円太郎馬車の馬見たようにぼんやりとして軒の下を歩きますから、煮豆屋の看板へ頭を打ちつけたりして、口をあきながら上をながめ、

「なるほどゆうべは振られるわけだ、ここにさ、豆と書いてある」

と濁点をとって読んじますが、実にお女郎買

いぐらいな愉快はありません。

「エエオイ、どうだエ行きてえな。どうだエ？ そっちア銭があるか？」

「エ……ないヨ」

「いつでもないね。手前は」

「フフあいにくだ」

「手前のあいにくは二三年聞いてるぜ」

「ウン、このあんばいじゃアもう四五年つづかア」

「しょうがねえやつだな。しかしどうかして行きてえな。どっかの金持ちの若だんなを一つ取り巻いてオンブで行きてえな」

「金持ちの若だんなア？……あるよ、質両替屋のむすこだがどうだろう」

「ムムそいつア強氣だが、金はあるけえ？」

「ドシとあるね」

「手前心やすいのか？」

「ウン、芝居へ行くにも寄席へ行くにも、湯へまでもおれといっしょでなければ行かねえんだ」

「そいつア豪勢だが、どうだろう、女郎買に行くかえ」

「ムムウ……女郎買いは少しむずかしいや」

「年はいくつなんだよ」

「とって四つなんだ」

「なに四つウ？ なるるヨこん畜生、子どもじゃアねえか」

「じゃアこういうのはどうだろう、四十二歳でエのがあるが」

「フフフなんだか芳町の桂庵へでも行ったようだな、四十二たア」

「ウン」

「女郎買いにヤア行くだろうな？」

「そいつアむずかしい」

「金があつてもか？」

「ムムウ、いけねえ」

「なんだエそいつア」

「エ……取揚げ婆さんだ」

「なぐるぜほんとうに、冗談じゃアねえぜ、人をばかにしやアがるねえ。……どっかに金持ちの若旦那は……ウン横町の伊勢屋のキザをズツと取り巻いて行こうじゃアねえか」

「だってあいつはキザでたまらんもの」

「それは我慢をしる、どうでオンブで遊ぶんだから仕方がねえ。——ア、うわさをすりやア影だ、向うからきたきた……。みな黙っておれに任せておけ。」

「エ若旦那なこんちは」

「イヤこれはどうも……（反身そりみになって、扇あふぎを胸にあて

パチパチさせて）よくみなさんお揃いですな。女殺しがお集まりでげして」

「へへへどういたしやして、犬殺しもおぼつかねえのでござえやすが、若旦那などは男ぶりがよくッてお金があつて、その上なりがこつて、お持ちものまで行き届いているから、女のほれるような器械にできていますが、ゆうべなどはどっかへおいでな

すつたでげしよ？」

「ゆうべなどは、エエ楼ろうへまいりましたヨ」

「へエエ……どこでげすとエ？」

「楼へまいりましたヨ」

「牢ろうへ……。ヘエ、それはとんだ間違えで。——オオみんな聞いたか、若旦那は牢へ行ったとよ。」

——牢てエのはやっぱりあの懲役ちやうえきでげしよう？」

「へへへおわかりがありやせんか。青楼せいろうへフケたのですヨ」

「へエエ……餅屋もちやへ」

「フフフ、イヤ北国へまいったのでげすヨ」

「へエエ……だいぶ遠方へ」

「イヤまだおわかりがありやせんて困りやしたね。」

吉原へまいったのでげすヨ」

「エエ？ そんならそうと早くいつて下さればいいに、符牒ふだでいうからわかりやせん」

「ゆうべ夜つびいて女が私を寝かしませんでした」

「ホウラそろそろおいでなすツた。へエエ」

「二時ごろに頬の辺を食いつきやしたネ。三時二十五分のときがあひで、明け方が喉笛のどふえ」

「へエエ若だんなの女郎買いは命がけでおいでなさるんで。どうかわっちどもを今夜連れてッて下さいな。そのかわり向うへ行つて芸はなんでもいたしやす、へエ。喜三は鯁鉾立ちが名人で、竹の野郎はひとり相撲がうめえんで」

「へへへこれは恐れ入りやしたネ。君がたのは芸ではない、ふざけなんです」

「若だんな、どんなことをしろといつても、わっちアやりますが、若だんなはどんなことをなせえますか？」

「拙などはおもに一中をやりますよ」

「あれは腰が冷えなくッてようがアすけれども、はだかになったかっこうが悪うございますね。帆かけ船が難船にあつたようなあんばいしきで」

「フフフこれは恐れ入りやしたネ。君、河東などを存じでげすか？」

「エ加藤？ あれは知ってます」

「オオそれは感服でげすナ」

「加藤てエのはナンでげしよ？ 朝鮮で虎をはり殺して二十四日がご命日の強い小父さんで」

「フフフ、君のは加藤清正で、拙のいうのは一中節、河東節のことを申すのでげすヨ」

「へエエ……節はやつぱりにんべん（瀬戸物町で有名な鯁鉾問屋の名前）がよいそうで、ダシが一番きくそうでげす」

「ホホホ、なにしろ拙の申すことがちつとも感じないのは恐れ入りやしたネ。しかしご同伴いたしやしようか？」

「へエエ……」

「ご同伴いたしやしようかネ」

「へエ。——竹エ」

「なにイ？」

「手前、ご同伴てエものを知ってるか」

「知ってるのよ」

「なんだ」

「なんだって、ムムウご同伴は買ったんだがア、

……火事のときに焼いちまった」

「それつきりご同伴を買わねえのか、大事にしておけばいいのに。へへへ、若だんなご同伴はソノ竹の野郎のところにあつたんでげすが、火事のとくにみん

「ななくしツちめえやしたが、へえお気の毒さまで」
 「フッフ実(じつ)にどうも、フッフ君(きみ)がたは、フッフお腹(はら)を捻(ひね)りますネ。ご同伴(どうはん)てエのは品物(しんぶつ)じゃアないヨ。」

「一緒にまいりますことがご同伴(どうはん)で」

「エエ? そうでげすか。ーヤイコン畜生(ちくせい)!」

「アハハハ」

「笑(わ)うねえ、べらぼうめエ。知らなければ知らねえ
 といやアがれ。つまらねえことを人にいわして恥(はづ)をかかせやアがって」

「フフおれもなんだか知れねえから、手前(てまえ)にいわたし
 てみたんだ」

「ふざけるねえ、若(わ)だんながご同伴(どうはん)に連れてって下
 さるとよ。へへどうか願(ねが)えます」

「しかし君(きみ)がたの三尺(さんしゃく)帯(おび)では不都合(ふごう)で、どうかお羽
 織(おび)と帯(おび)を算段(さんだん)してくれたまえナ。拙(せつ)の活花(かっけ)の友(とも)だち
 のつもりにしますから」

「エよろしゅうござえやす。ーみんな三尺(さんしゃく)帯(おび)では
 いけねえんだ。羽織(おび)と帯(おび)を算段(さんだん)すれば、ただ連れて
 って下さるでエから、みな算段(さんだん)しようじやアねえ
 か。ーじゃア若(わ)だんな、横町(よこまち)の碁会所(ごかいしょ)に少し待(まち)つ

てて下せえ。逃(に)げると罰金(ばつぎん)をとりますよ」

とこれから皆(みな)したくをしにまいりました。しばらく
 くして帰(かえ)ってまいり、

「へえ若(わ)だんなお待ち遠(とほ)さま」

「へえお待ち遠(とほ)さま」

「お待ち遠(とほ)さま」

「これはこれはおしたくができましたナ。源(みなもと)ちゃん、黒(くろ)の紋付(もんつき)でげすネ。民(たみ)ちゃん是小紋(こせもん)ですナ。御(ご)帯(おび)が唐更紗(からざら)で、イヤこれはどうもはじめて拝見(はいけん)いた
 しましたが、よほど奇体(きたい)なものでげすナ」

「へへへ面目(めんぼく)ねえが、こりやア帯(おび)じゃアねえんでげ
 す。年玉(としだま)にもらった風呂敷(ふろしき)敷(しき)を、四(よ)つにたたんで三尺(さんしゃく)
 へはさんだので、前(め)から見ると帯(おび)のようだが、後(うしろ)
 から見れば三尺(さんしゃく)だから、前(め)帯(おび)の後(うしろ)三尺(さんしゃく)で実は風呂
 敷(しき)でげす」

「(ポンと手を打ち)どうもこれはようがすナ! 定(さだ)ち

ちゃんのお羽織(おび)は大(おほ)そう短いようですナ」

「わっちの知(し)つてるところの坊(ぼう)ちゃん(ちゃん)が、学校(がっこう)へ行
 くてエのを、無理(むり)に借りてきたんでげす」

「よほど短いネ」

「エエとって十一になるン」

「それじゃア短いはずで」

「ナニこれはね、たたんでそばへ置いて、羽織のあつもりにしやしよう」

「なるほどこれもよろしい、イヤご趣向。——滝ちゃん、君はお紙入れまで所持は恐れ入りやしたネ。どうもなかなか紙入れまで気のつくものではないが、実に恐れ入りやした。ちよいと拝見したいネ」

「へへへ、実は紙入れではないので。わっちア全体やせているから、なんかふところに入れねえときまりが悪いから、へへへこれは煉瓦を一本さらいだんで」

「フフフ煉瓦のお紙入れ？　こいつアようがアすネ」

「ナニ冷えてまいり、ようがアせん。こいつをふところへ入れてから、もう小便に六べん行きやした」

「おもしろいネ！　——熊ちゃん、君は帯がないようでげすナ」

「エわっちアござえやせん」

「なくっちゃアいかんじやアないか」

「なくともようがアす。この野郎とあいつとふたり並べて、その間から顔を出して行きやす」

「小便に立つときなどはどうします？」

「そのときは両方のお尻をちよいちよいと突ツついて、二人が立つにしたがってわっちもすり出しやす」

「すり出すツて後ろから見えましよう」

「ナニ横に歩いて行きやす」

「フフフ蟹じゃアあるまいし、それでは君だけは後してのことサ」

「エエようがす、今度にします」

「イヤそれはいけない、君ひとりぐらいなくてもよい……が、どっか借りるところはないかネ、因業なことをいうようだが」

「差配人のところへまだ行かねえから、行つて見やしよう。——エエこんちゃア」

「オヤだれかと思つたら熊さん」

「だれかと思つたら熊さんで。（親指を出して）レコはうちにいますか？」

「なんだエ親指なんぞを出して。うちの人は少し用

「があつて山の手まで行きましたよ」

「羽織を着て行きましたか」

「あたりまえさ。羽織を着ずに行くものがあるかね」

「じゃアもうあとにあるめえね」

「失礼なことをおいいでない。貧乏をしても羽織の一枚や二枚はあるよ」

「あるウ？ それを出しておくんねエ」

「なんだエ出しぬけに……」

「ちよいといま羽織があればもうかるんで」

「そんならそうと早くいえば、出してもあげようじヤアないか。サア」

「なるほど、紋がついてらア。……大蛇うわばみの紋だね」

「ホホホ大蛇うわばみじゃアない、かたばみだよ」

「そうか、なるほど。(引ひかけて着て)これはいいがどうでげすエ？ よく似合いやしう？」

「そうさねえ」

「さようなら……」

といいながら帰りにかかるから、

「(あわてておしとどめ)ちよいとお前、どこへ行くん

だ、それを着て」

「へへへ、実はおかみさんこういうわけで。いま伊勢屋の若だんなが、今夜女郎買いに連れて行くてエんだ。ところが帯と羽織を算段してもらいてえと、ほかのものはみなできたんだ。わっちばかりできねえんでげす。すぐに返すからどうぞ少し貸して下せえまし」

「イエいけないよ、いけません。お前はなにを貸したって、ちゃんと返したことがないもの」

「あれ？ なんだって、ちゃんともってきて返かえすじヤアありませんか」

「うそばかり。去年の大晦日おおみそかに帯をもつてツたきり、まだもつてこないじヤアないか」

「エエあれをまだ覚えていますかイ」

「だれが忘れるやつがあるかい。それもお弔じようろういに行くくともいうのなればいいが、女郎買じようろういなどに行くてエものに貸しては、うちの人が帰ってくると、私が叱しかられるよ」

「フフフ、実はその弔じようろういなんです。そういたら縁起が悪かろうと思つて、うそをついたんです」

「ムム？ だれが死んだの？」

「ムムその、あれが死んだんでけす」

「だれが死んだのだよ」

「お長屋のものでげす」

「長屋……だれが？」

「おじいさんで」

「小間物のおじいさんが死んだのかい？」

「へエ」

「わからないもんだね」

「エエ、知れねえもんですね」

「いつだエ？」

「明け方で」

「明け方？……お前、明け方にうちの前を包みをしよって通ったよ」

「エなに……その、実は洗濯屋のばあさんで」

「ホホホかわいそうにお前、洗濯屋のおばあさんは、二階へきて裁縫しきぬをしているよ」

「エエ……そのうちにだれか死にましよう」

と、そのまま飛び出してまいり、

「アア驚いた。若だんな行ってきたやした」

「オヤ羽織ができましたネ、これは結構」

「エエいろいろ心配して、ようようのことでできやした」

「イヤこれでよろしいよろしい。——じゃアこれから行くんでげすが、君がたにいうことがありやす。君がたは向うへ行っても、むやみにしやべってはいけませんヨ。口をきいてくれるてエと拙せつが困りやすから」

「エエようがアす、若だんなが呼んでも返事もしやせん」

「瀧ちゃん、君に願いたいことがある。というのは、君を床の間の前の上座へすわらせるから、後ろの容齋ようさいの掛けものを見て、よい筆にできているとほめてもらいたいんだ」

「よろしゅうござえやす、ほめるのはわっちア名人だ。太えやつだッてほめるんですか？」

「アアアそんなほめようじゃアいけない。向うへ行くと幫間たいこまがきやす」

「夜番のでげすかい？」

「ナニ座敷を浮かせる男芸者おとこけいしやがそれへきたときに、

君が少し反り身になって、容斎の鯉はよほどよく描いてあるが、惜しいものを故人にしたネといつてもらいたい」

「なるほど……。もう一ぺん」

「容斎の鯉はかほどよく描いてあるが、惜しいものを故人にしたねエ、と」

「容斎の鯉はよほどよく描いてあるが、惜しいものを故人にしたッてエでげすか？」

「そうで。——竹さん」

「ヘエ」

「君がネ」

「ヘエ」

「君たちの前だけれども、ただいまでは重箱の鯉でもねえのう、と」

「これは大変で。なんでげすとエ？」

「君たちの前だけれども」

「君たちの前だけれども」

「ただいまでは」

「ただいまでは」

「重箱の鯉でもねえのウッてんで反り身になつても

らいたいよ」

「これはむずかしい……。ねえのう……（そっくり返る）」

「もつと落ちついて」

「ねえのう……」

「その呼吸で」

と、これから吉原へまいって、ある楼へ上がり、ずっとお座敷へ着きますと、幫間芸者がそれへやってきまして、

「ヘエ今晚は。桜川善孝で」

「ヘエ民仲。今晚は、石町さま」

「これはみな私の友だちだヨ」

「ヘエさようでげすか。——どうぞまたなにごんごひいきを願います、善行でげす」

「きたきた。エ、オイおれの後ろにある化けものを見ろ」

「ヘエエ」

「容斎の鯉なア？」

「ヘエヘエ」

「よく描いてあるなア」

「さようでげす、よほどいい筆だそうでげす」

「惜しいものを乞食にしたなア」

「へへへ、ご冗談もんさまで」

「オウオウ今度はおれの番だ。——君たちの前だけ

れども」

「へエ」

これより非常の大声にて、

「君たちの前だけれども」

「へエ」

「ただいまでは箸箱……じゃアねえ」

「へエ」

「香箱……でもねえ」

「へエ」

「重箱の鯰でもねえのう」

と一生懸命にあまり反ったので、後ろへひっくり

返りました。へエご退屈さま……。

解説

円太郎馬車

明治十年代からさかんになった無軌道の乗合馬車。円朝門下の四代目円太郎が高座でラッパを鳴らし「おばあさん、あぶないよ」と馭者のまねをして人気をとったところから、普通名詞にまでなった。

させん豆

坐禪豆（甘く煮つめた黒豆）の濁点をとるところということになる。

質両替屋

質屋が両替屋をかねていた例が多い時代のなごりで、為替・銀行制度が発達してから質屋をこう呼んでいたもの。

ドシとドッシリと。

芝居

このなまり、いまでも明治東京っ子からときおり聞くことがある。

桂庵 私設の職業紹介所。事実、芳町に多かった。女のほれるような器械

「器械」「機械」も流行語で「茶の器械」土びんなどとやたらに使う。

青楼

遊郭。昔の中国の妓楼が青うるし塗りだったのによる。

北国

吉原は江戸の北にあたるから。北州ともいった。

一中

一中節だが兄イは越中と聞きちがえている。今の人には越中は腰が冷えなくっていいとはちよっと変に聞こえるかもしれない。が、まだ猿又・パンツの類が一般化していない時代のことだ。六尺よりはたしかに露出部分が少ない。

にんべん

速記原文にはカッコして「瀬戸物町にて有名なる經節間屋の名前」と註が入れてあるとおりの老舗で、創業元祿十二年。十一代目が日本橋室町二の八に健在。

差配人

大屋（大家）。家主。

容齋

菊池容齋。明治十一年歿の歴史画家。故実考証で名をなした。

重箱

これも老舗の一つ、山谷のうなぎ屋。重箱は愛称で正称は鮎屋儀兵衛の鮎儀。劇化上演もされた久保田万太郎作『火事息子』はその五代目の物語。

§

いまは途中の「そのうちにだれか死にましよう」で落とすようになってしまっている。そり身になりすぎてひっくり返った——ではあまりおかしくないからというのだらうが、容齋や重箱が「上等」だった時代だから、それを口にしてそり身になるのもちゃんとした気どりだったわけで、それなりにおかしかったはずなのだ。

「キザ」に「半可通の略言なり」と註がある。そのキザ氏の第一声「イヤこれはどうも」のト書は「——バチバチさせ」まで本文に生かしたが、実はそれに「すべて野だいこの形と知りたもうべし」とつづいている。この辺が『百花園』速記の律気なところだ。「二時ごろに——」は現・文楽の『酢豆腐』の若旦那ものたもうている（安藤鶴夫著『落語鑑賞』所収）。同一人物かと思って『落語国・紳士録』を調べたがわからない。

ガタクリ馬車、乞食馬車の別名さえあった円太郎馬車の馬——酷使されてヨボヨボだったそうだ——にふられ客の朝帰りの姿を見立てたあたり、当時は大受けだったろう。